

# 新美南吉記念館だより

NIIMI NANKICHI MEMORIAL MUSEUM NEWS

発行 新美南吉記念館 〒475-0966 愛知県半田市岩滑西町1・10・1 Tel. 0569-26-4888 <https://www.nankichi.gr.jp>



## 童話作家へ、 第一歩！

二月十五日(土)に、半田市市民交流センターで第三十六回新美南吉童話賞の表彰式を行いました。

**表** 彰式の一週間前、温暖な知多半島にしては珍しく、こ

んもりと雪が積もりましたが、この日は寒さも和らいで絶好の式典日和に。応募総数一六三七点の中から選ばれた十七名の入選者たちが会場へ足を運び、晴れやかな顔を見せました。

式典ではまず主催者として半田市教育長が挨拶し、その後、表彰状授与へ。さらに審査員で児童文学作家の山本悦子先生から総評をいただきました。

今回は「小中学生のお話が際立って面白かった」といいます。どれを入選にするか悩まれたというほど。一方で最優秀賞が新美南吉オマージュ部門から選ばれたことについては、受賞作『どろぼうの悲しみ』が南吉作品の世界観を壊さず、良い作品に仕上がって、満場一致で決定したと話されていました。

それから半田市長が祝辞を述べて、最優秀賞に輝いたやまとそらさんがスピーチを行いました。

やまとさんは、南吉の童話『でんでんむしのかなしみ』を読んで、「悲しみは無かったことにならないけど、見えなくても、悲しみがつまった殻の中には幸せや希望のかけらが隠れているんじゃないか」と思ったそうです。それを南吉が描いたでんでんむしに伝えたくて、作品を書き上げたことでした。

そして、そんな思いのもとに生まれた『どろぼうの悲しみ』を、南吉童話お話の会「でんでんむし」の竹内照子さんが朗読して、式典は終了しました。

最後に入選者、審査員、来賓で記念写真をパシャリ！新美南吉童話イメーჯキャラクターの「ごん吉くん」も登場して、場を和ませました。

## 受賞者へのインタビュー

最優秀賞を受賞された、やまとそらさんに、お話をうかがいました。



——入選の連絡が来た時のことを教えてください。

オマーージュ部門へ応募したので、自由創作部門と比べて数が少ないですし、分母が小さい分、入選候補になる対象も少ないんじゃないかと思っていたので、入ると思っていないで、すごく驚きました。夫と二人で「ほんとかな、ほんとかな」と言いながら、何に入っただろう、佳作でもいいから入選してたらいいねという話をしていました。

——新美南吉童話賞に応募された理由は何ですか？

一番は創作仲間が「この賞出してみたら合うと思うよ」と勧めてくれたことで

す。夫も後押ししてくれました。それから童話を書いている者としては、やっぱり新美南吉の「ごんぎつね」が原稿用紙8枚にまとまっているのがすごいなと思っているので、童話の金字塔のようなイメージがある新美南吉の賞に、ちよつと挑戦してみようかなと思って書いてみました。

——お話を書かれるようになったのは、いつからでしょうか？

小学3年生の時に国語の授業で「お話を書こう」というのがあって、それが一番初めです。そこから書き始めて、書いたお話を当時の図書館司書の先生に読んでもらったら、製本して返してくれたんですね。10枚行くか行かないかの作品でしたが、それから味を占めたというか(笑) お話を書くようになって、今に至っています。

——では、ずっとお話を書き続けているんですね。

そうですね。大学も児童文学の研究を専門にしているところへ行つて、そこでも創作の授業を取ったり、同人誌に入って創作をした

りしていたので。

——いろいろなジャンルがある中で気がついたら童話へ進んでいたのでしょうか？

児童文学を読むのがすごく好きだったんです。高校時代もYA(ヤングアダルト)など読んでいましたが童話が好きで、あまんきみこさんとか、岡田淳さんとか、安房直子さんとか、童話もずーっと読んできたので、自分の好きな分野で書いてきました。

——今回、応募作品のオマーージュ対象に「でんでんむしのかなしみ」を選んだ理由を教えてください。

候補として挙げられている作品の中で一番好きなお話だったことと、他者の悲しみに寄り添ったり、立場も違う人の苦しみを考えるきっかけになったり、今の世の中にすぐ必要なお話だなと感じたので、できれば「でんでんむしのかなしみ」をオマーージュしたいなと思いました。

オマーージュってどうやって書いたらいいのか、難しいなとも思いましたが、もし息子が一匹のでんでんむしだったとしたら——お話

の続きじゃないですけど、新美南吉が生み出したでんでんむしに、私だったらどんな言葉をかけてあげたいだろうと考えました。

——受賞作では、悲しみと幸せが分かれたものではなく表裏一体のものであるように描かれていましたね。

ちよつと昨年、大好きだった祖母が亡くなりました。亡くなったこと自体は悲しいし、祖母のことを思い出すと悲しくなりますが、悲しいことも見方を変えれば幸せだった思い出につながっているんだと感じていて……。どう考えても悲しいという悲しみもあると思いますが、その悲しいことも、長い目でみれば希望につながっていたり、かき分けていけば幸せや希望が隠れているんじゃないかというのを、祖母のことを思い出しながら考えていました。

——南吉作品には受賞作と同じく泥棒が出てくるものがいくつかありますが、意識されていますか？

これはたまたまですが、そういわれてみれば、オマーージュを作るとを念頭に

に入れた時に、世界観を南吉に寄せていくのはどうだろうと考えていました。まったく違う世界で現代をイメージするより、南吉童話の雰囲気や世代感に寄せたところから作り上げると、一つのオマーージュになるんじゃないかと思って、意識して書いていたので、いろんな南吉作品のイメージが無意識のうちに私の中にあつて、その影響が出たのかもしれない。

——お話を作る時に心がけていることはありますか？

一番は、絶望で終わらせないで、ちよつとでも希望とか幸せとか楽しさが見いだせるようなお話を書くように心がけています。

——最後に、今後の抱負をお聞かせください。

新美南吉のように、たくさん子どもたちに愛されるお話を書いていきたいです。今、子どもたちはいろんな状況にあるけれど、私の書いたお話を読んで、それでも自分のいる世界はきつと希望につながっているんだと感じられるようなお話を書いていきたいかなと思っています。

## 南吉とわたし 26

教育人類学者

鶴野祐介



私は昭和三六年(一九六一)に岡山県上房郡北房町(現・真庭市)に生まれました。中国山地の山あいにある、田畑や川や灌漑水路の間に民家が点在する田舎町でした。

小学三年生の九月のことだったと思います。ある日の朝会で担任の先生が言いました。「今日、K君が事情でお休みします」。先生はそれ以上何も説明しませんでした。休憩時間に同級生の女の子が彼の欠席の理由を話してくれました。前日の晩、母親に言われて残飯を捨てて田畑の方を歩いていたら、蛍が二匹飛んでいました。追いかけていたら気を失って、目が覚めたら稲田の中にいたという。こんな季節に蛍が飛んでいるはずはない。二匹の蛍だと思ったのは、狐の眼だったのだ。K君は狐に化かされたに違いない。そのように家の人から聞いたのだそうです。

数日後、K君は登校してきました。そしてこれまでと同じように私たちと一緒に遊んだり勉強したりしていました。でも、私も含めて同級生の誰もそのことについて本人に質問しようとはしませんでした。その話題に触れたら狐の祟りがあるのではと考えたからかもしれません。先生にも両親にも何も話しませんでした。ただ、月光を浴びて輝いている狐の二つの眼が、蛍のように中空をふわふわ飛んでいるのを追いかけていき、稲田の中で気を失ったK君の姿を夢想していました。

新美南吉の「狐」は、晩に新しい下駄をおろすことになった文六ちゃんがお婆さんに言われて、狐に憑かれたかもしれないと案じる周りの子どもたちと文六ちゃん自身の心の動きを描

いています。冒頭部分の「こんな月夜には、子供たちは何か夢みたいなことを考えがちでありました」の語りが作品全体に響いています。私の夢想の中でも、K君や彼が追いかけていた狐や稲田を月光が照らしています。

ところで、レイチェル・カーソンは『センス・オブ・ワンダー』の中で次のように言います。「妖精の力にたよらないで、生まれつきそなわっている子どもの『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮にたもちつづけるためには、わたしたちが住んでいる世界のよるこび、感激、神秘などを子どもといっしょに再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、すくなくともひとり、そばに必要があります」(上遠恵子訳)。

「狐」には、三人の大人が重要な役割を担っています。まず、「晩げに新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」と子どもたちを脅かしたお婆さんは、世界の神秘を開かせてくれました。次に、下駄屋の小母さんは「これでもう、狐も狸もつきやしん」と呪いをして、世界の神秘を分かち合ってくれました。そして文六ちゃんのお母さんは、狐に憑かれたのではと心配する文六ちゃんに、「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、……人間をやめて、狐になることにきめますよ」と、三人で山の中で暮らすといい、もしも猟師に撃たれそうになったら、母ちゃんが囨おどろりとなって文六ちゃんを逃がしてやるという、世界の神秘を分かち合うと同時に、ずっとそばにすることを文六ちゃんに約束するのです。あの時、担任の先生や両親にK君の狐の話は本当だろうかと思ねてみたら、どんな返事が聞けたらと思う巡らせるのです。



## 【執筆者プロフィール】

1961年岡山県生まれ。2004年英国エディンバラ大学にて「スコットランドと日本の伝承子守唄の比較研究」で博士号取得。子ども期の伝承文化や児童文学・児童文化が子ども的人格形成に及ぼす影響について研究している。現在、立命館大学文学部教授。

## 著作紹介／『センス・オブ・ワンダーといのちのレッスン』(出版 港の人)

レイチェル・カーソンはじめ「センス・オブ・ワンダー」を生きた先人たちの道を辿りながら、人がよりよく生きていくために必要な「いのちのレッスン」とは何かを考察している。



# 記念館からのお知らせ

## 新美南吉没後 82 年 『貝殻忌』

3月22日(土)、新美南吉は82回目の命日を迎えます。様々なイベントを通して新美南吉を偲びましょう。

3/20(祝)  
▼  
3/23(日)



### 3月22日(土)「命日」 ※入館無料

- ・「貝殻忌」式典(朗読/南吉童話お話の会“でんでんむし”うた/つばさ幼稚園園児、献花)
- ・折花体験ワークショップ(要予約)
- ・蓄音機コンサート

### 3月20日(祝)

- ・AMI 南吉を歌う

### 3月20日(祝)～23日(日)

- ・南吉クイズ(中学生以下)

### 3月23日(日)

- ・貝殻忌ウォーク～ガイドと歩く文学散歩～(要予約)
- ・けん玉、こま、筒けん 遊びコーナー
- ・俳優 石川恵深の紙芝居
- ・うたとお話の会
- ・デコパージュでウッドキーホルダーを作ろう!



折花体験

ウッドキーホルダー



記念館 HP



## 日誌抄

### 十二月(師走)

▼3日 記念館公式インスタグラム開設▼5日 NHK名古屋「まるっと!」で戦争と南吉をテーマにした特集が放送▼7・8日「えと人形に絵付けをしよう!」。74人参加▼21・28日 『手袋を買いに』の日。館内で白銅貨を見つけた子どもにも記念品をプレゼント。293人参加▼27日 記念館公式note開設▼同日 常滑イオン未来屋書店で紙ランプ作りWS

一月(睦月)

▼4日 令和6年度「新美南吉読書感想画コンクール」受賞作品展始まる(2月16日)▼13日 企画展「新美南吉記念館開館30年の歩み」終了。会期中観覧者数13259人▼18日 ガイドボランティア「南吉案内人」例会▼26日 第202回新美南吉読書会。14名参加

二月(如月)

▼17日 NHK・Eテレ「グレートールのかまど」で「新美南吉のあんまき」編放送

## 終刊のお知らせ

新美南吉記念館だよりは本号をもちまして終刊いたします。平成六年に発行して以来、長らくご愛読いただきまして、誠にありがとうございました。ごさいました。

今後はメディアプラットフォームサイトnoteへ発信の場を移します。記念館の活動や南吉についてのコラムなどを掲載していきますので、ぜひ左のQRコードから記念館公式アカウントへアクセスし、フォローしてください。



## ご寄付のお礼

新美南吉顕彰基金へご寄付くださった皆さま、誠にありがとうございました。令和六年度に一万円以上のご寄付をされた方のお名前を掲載いたします。(希望者のみ・敬称略)

- ・横田 邦子
- ・山守 ひとみ